

論文

大学初年次生の「学生化」プロセス

住岡 恭子

キーワード：大学初年次生の「学生化」／質的研究法／半構造化面接／修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

問題

青年期の発達に寄与する大学という場

本研究の対象者となる大学生は、支配的で明確なアイデンティティが安定するまでの「心理—社会的猶予期間（モラトリアム）」とされる青年期にあたる。モラトリアムとは、Erikson, E.H. (1959; 小此木 訳編, 1973) の提唱した概念である。モラトリアムの間に、青年は現実の社会に対して一定の距離を保ち、生計のために働いたり、世間の雑事にわずらわされたりすることなく、自由な精神で修業や役割実験に取り組む。そして、職業生活のために必要な知識や技術を獲得するだけでなく、一人前の社会人として必要な種々の能力や意識、自覚を身につけてモラトリアムは終結する（高木, 1999）。小此木 (1978) は、Erikson のいうモラトリアムを「古典的モラトリアム心理」と名づけている。

1980年代前後になり、経済的豊かさを背景に大学が大衆化し、大学に在学しながらも勉強をせずにアルバイトや各種の遊びにふけることで「モラトリアム」を謳歌するようになった青年たちが増え、留年や退学が社会問題化した大学は「レジャーランド」と呼ばれるようになって

た（渡部, 2005）。小此木 (1978) はこの時代の青年のモラトリアムを「新しいモラトリアム心理」と名づけている。1980年代以降の青年期の新しいモラトリアム心理を生み出し、許容してきたのは、ある意味で「大学」という場であったと推察される。

ここから、青年期のモラトリアムを「大学」という場で過ごすことには大きな意義があると考えられる。堀井 (2017) は、大学生を対象とした人間的な成長を取り扱った研究をレビューしている。堀井がまとめた研究数の多さから、大学生という時期には実にさまざまな成長がもたらされることが明らかである。そのような大学生の成長に、大学という場の特性や大学の教育システムが寄与しうることを、金子 (2012) や野崎・後藤 (2015) が示唆している。しかし、金子や野崎・後藤の研究は、大学側や教員側がいかにか大学生に成長を促進する学びを提供するかという、高等教育学的あるいは経営学的な見解からのものであり、主体となる学生自身が大学という場をどのように認識し、大学という場とどのように関わりながら、成長を獲得しているかは明らかでない。学生の立場や視点から大学における成長を検討した研究には、磯野・飛永 (2012) や、佐久田ら (2015)、ベネッセ教育総合研究所 (2015) などがあるが、概念の羅列や分類レベルにとどまっており、成長に関わるそれぞれの要素や概念の関係性や連続性が示されていない。

堀井（2017）は、大学生の成長についての研究において、実証的なアプローチや現代の大学生の心理に適合した研究が依然として不十分であると述べており、大学生の人間的な成長の概念を明確にした上で、その構造、要因、メカニズム等を実証的に解明する重要性を指摘した。ここから、大学という場の中で学生がどのように成長するかについて、(1) 複数の要素や概念の関係性や連続性をより詳細に検討する必要がある、(2) 現代という時代的背景における学生の姿に即した考察が必要であると考えられる。

現代の大学生をとりまく社会的背景と現代の大学生の特徴

現代の大学生をとりまく社会的背景は、10年ほど前より大きく変化してきている。1997年に、文部科学省は18歳以下の人口の減少傾向と、一方で高等教育への進学意欲の急速な高まりから、志願者に対する大学の収容力（入学定員）が、2009年には100%になるであろうという試算を示した（文部科学省、2005）。いわゆる「大学全入時代」に入るだろうという予測である。文部科学省による学校基本調査速報（2017）によれば、現在の高等教育機関進学率（過年度卒含む）は80.6%にのぼる。大学は淘汰される時代となり、その教育システムは大幅な変革期にある。大学や学部は統廃合され、AO入試など新たな入学試験の形態が出現している。少子化や長引く経済的な不況や、就職活動が厳しくなっていること（片桐、2009）などの影響もあり、大学にも中学校や高等学校のように、強い統制をとり入れ、管理主義的、社会化重視、未来志向的な性格にしようという「大学の学校化」が起きていると渡部（2005）は指摘している。そして学校化した大学の中で学生は、授業や課題を投げ出さずにとりくむようになり「まじめ化」と同時に、楽に単位を

とりたい、大学に指導してほしいと考えるような「生徒化」しているという（ベネッセ教育総合研究所、2016）。杉山（2016）は、「生徒化」している学生は、自律性が乏しく、学業に対して受動的な姿勢を示し、教員による指導を求める傾向にあるとともに、実用性のある教育内容を志向する受益者感覚が強い存在であると述べている。松本（2016）はこの背景に、学生の学問自体への興味の低下や多忙化があると指摘した。

溝上（2004）は現代の大学生が、Erikson（1959／小此木訳編、1973）の古典的なモラトリアムのように社会で一人前として認められることを重視するのではなく、自身の内部にあるやりたい事や将来の目標を出発点として大人社会に参入しようとするインサイドアウトという生き方をしていることを指摘した。そして目標がかなえられにくい社会とのギャップから、不満足感や充足しきれない感情を抱くという「ユニバーシティ・ブルー」現象を提唱している。大学の中で学業にまじめに取り組む一方で、やりたいことはかなわないという充足しきれないジレンマを抱えているのが現代の大学生の特徴であるといえる。

村澤ら（2012）によれば、バブル経済が崩壊した1990年代以降、日本社会における就労構造は大きく転換し、雇用の流動化、柔軟化が起こった。終身雇用制度は実質的に崩壊し、就職したら安泰というわけにはいかないリスク社会の中で、青年はリスクを避けて下手な冒険をしない無難で確実な生き方を選択するようになったという。原田（2013）は現代の青年を「さとり世代」ととらえ、学生との対話から現代大学生の特徴をまとめている。それによると、現代の学生は不景気の時代に生まれたことで、ある行動を起こす際にどのくらいのリスクがあるかという見込み損失で考える引き算の発想をも

ち、コストパフォーマンスを重視する。上昇志向はなくそこそこの生活を望み、空気を読むので大胆な行動に出たり目立ったりすることはしない。たくさんの情報を取捨選択してそれを活かすことに長けているため、主観で行動することは少ない、などの特徴があるという。価値やライフサイクルの選択肢は多様化し、会社では即戦力となる人材が優遇されるため、青年達は自身に人材=商品として付加価値をつけるべく資格取得に向かうようになった。淘汰される側となった大学側も、キャリア教育や資格取得を売り物にするようになり、資格取得のための科目が「自分が学びたいこと」に優先する事態が生じている。これが「まじめ」ではあるが、楽しんで単位を取れることを重視し、学問それ自体には興味をもてない「生徒化」した学生の特徴であろう。

堀井（2017）が指摘するように現代の大学生の心理に適合した大学という場における成長について論じる際には、上記のような現代の大学生をとりまく時代的背景を考慮しておく必要がある。

高校生から大学生への移行期としての大学初年次生の「学生化」の研究意義

杉谷（2016）は、学生の「生徒化」に対比させて、講義・演習を問わず、興味のある授業を好み、学習方法も学生生活も学生の自主性に任せるのをよいとする学生を「学生化」した学生と呼んだ。杉谷によれば、「学生化」した学生のほうが、「生徒化」した学生よりも学習に熱心に取り組み、大学での充実感を持っているという。しかし、大学入学時までには学校で身につくような学習習慣や高校時代の学習状況などについては、両者の間にあまり差はなかった。杉谷は「学生化」への移行には、学問の深さとそれを示す教員の熱意にふれられること、「学生」

として自主性を尊重される学びの実感を得ることなど、「大学」らしい大学教育の心象が残ることが関係していると示唆している。つまり、学生が「学生化」するためには、高校までの「生徒」としての経験とは異なる、大学という独自の場で得られる新たな「学生」としての経験を得ることが重要と考えられる。

磯野・飛永（2012）は、特に大学時代は、住環境や通学形態の変化を通して生活リズムや生活習慣といった日常生活の基盤に大きな変化が起こり、加えてゼミや演習に代表される大学教育は、出席の仕方や成績の出し方、また授業で学生が求められることが高校教育と比して大きく異なると述べた。また就職を控えて進路を決定するうえで自己に向き合う体験が必須となることも指摘した。野崎・後藤（2015）は高校生活から大学生生活への移行は、自我同一性の確立が中心的課題となる時期に重なっているために、中学から高校とは異質の要素が含まれると述べた。野崎・後藤は特に高校とは異なる大学生生活の特徴として、接触する相手や自らの行動範囲の広がり、生活面における自立を挙げている。

異なる学校段階への移行は、それを体験する学生にとっては非常にストレスフルな出来事であるといえる。原田ら（2018）は、学校段階間の移行に伴う児童・生徒の不適應の問題が社会的に注目されていることに着目し、高校とのギャップにとまどう大学初年次生の混乱を「大1コンフュージョン」と述べてその実態を明らかにした。一方、飯村・宅（2017）らは、思春期におこる高校への学校移行がレジリエンスや外向性の高まりというポジティブな発達の影響をもたらすことを示した。大学への学校移行についても同様に、学生にとって危機的な状況であると同時に成長を促進する機会ともなると想定される。そして大学という学校への移行がも

たらずもの一つが、学生の「学生化」であると考えられる。

上記の点から、高校生から大学生への移行期としての大学初年次生に焦点をあてて、変化や成長を検討する意義がある。堀井(2017)は大学生の成長についてレビューする中で、「学生生活サイクル」という概念を紹介している。「学生生活サイクル」とは、鶴田(2001)によれば、大学生が「さまざまな課題に直面し、それらを克服したり、克服しなかったりすることを繰り返しながら成長していく過程」と説明されており、堀井はこれを「学生期が学年の進行に沿って心理的課題が変化する一つのサイクルを描いている」という着想に端を発しているとしている。大学初年次生の「学生生活サイクル」上の心理的課題としては、第一に高校から大学生活へ移行していくことが挙げられるだろう。ベネッセ総合教育研究所(2015)の調査によれば、4年生大学卒業生の各学年における成長実感の割合は、学年にともなって上昇している。初年次生は成長というよりも、むしろ高校からの移行期として、いかに大学という場になじみ、大学生としての態度を身に付けるかという「学生化」のほうがメインの課題となると考えられる。そして初年次生の「大学生化」は、以降の学年における学生生活の中での成長や卒業後の適応にも深く関わってくるだろう。しかし、初年次生の「学生化」への移行のプロセスを学生自身から得られるありのままを映し出したデータから詳細に検討した研究は少ない。

目的

以上より、本研究では高校から大学への移行期の途上にある大学初年次生を対象にして、大学という場における彼らの成長や変化を「学生化」という概念でとらえ検討することを目的と

する。その際、(1)複数の要素や概念の関係性や連続性をより詳細に検討するために、大学生自身の視点から実態をできるだけありのままにとらえることのできる質的研究法を採用し、(2)得られた結果について現代という時代的背景をふまえた考察を行う。

方法

調査方法と分析方法の選定

研究対象である大学生自身から、現実の多様性や複雑さの実態について、ディテールの豊富なデータを収集するため、質的研究法を採用し、半構造化による個別面接調査を実施した。高校から大学への移行における適応のプロセスを検討するために、調査対象者は大学初年次生のみ限定した。

分析には木下(1999、2003、2007)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下M-GTAと略記)を用いた。M-GTAは1960年代にGlaserとStraussによって考案された、データに密着した分析から独自の理論を生成するための質的研究法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ(Glaser & Strauss、1967/後藤・大出・水野訳、1996)を基に考案され、分析技法が明確で、実践しやすいのが特徴である。M-GTAが面接調査の分析に適しており、手続きが詳細で具体的であるという点、独自のプロセス性を持つ理論を生成することができるという点が、本研究の目的と合致していたため、分析方法として用いることとした。

調査の手続き

調査時期は2018年3月であった。調査依頼はインターネットへの掲示や縁故法によるメール配布をもちいて筆者が個別に行った。Googleフォーム上での調査の説明に同意し、自ら連

絡先を入力した10名（男性2名、女性8名）（Table1）の協力が得られた。協力者の年齢は尋ねていないが、全て大学に現役で合格した初年次生であった。調査場所は筆者の所属する大学の個人研究室であった。交通費兼謝礼として調査場所となった大学に所属する協力者には1000円分、それ以外の大学に所属する協力者には2000円分のクオカードを手渡した。

半構造化個別面接調査は質問項目を記したイ

ンタビュー・ガイド（Table2）にしたがって行われた。面接実施場所は個人研究室であった。面接時間は1人あたり30分～60分程度であった。面接過程はICレコーダーに録音した。面接は、より自然な会話の流れになるように配慮し、途中で質問を入れるなどして、目的に合ったデータが得られるように心がけた。またM-GTAにおいては、得られた逐語を一連のデータとして分析することを考慮し、個々の調査協力者に対してインタビュー・ガイドの質問項目すべてを無理に問うことはしなかった。

Table1 調査協力者

No.	性別	学部・専攻
A	男性	心理学
B	女性	心理学
C	女性	心理学
D	女性	心理学
E	男性	心理学
F	女性	メディア
G	女性	心理学
H	女性	保育
I	女性	心理学
J	女性	情報

倫理的配慮

Google フォーム上での調査協力者募集時と、面接調査開始時の二時点において、以下の事項についての説明文を提示した。1) 大学生活への意識を明らかにする目的で調査を行うこと、2) 面接過程の記録のために録音を行うこと、3) 調査への参加は任意であり、参加の取り消しや調査の中断により一切の不利益を受けないこ

Table2 半構造化面接に用いたインタビュー・ガイド

質問項目とその具体的な内容	
1. 入学前に抱いていた大学へのイメージや期待	<ul style="list-style-type: none"> ・大学に入ってどのようなことを学びたいと思っていたか ・どのような活動に参加したいと思っていたか ・大学に入ること、どのようなことが得られると思っていたか
2. 現在の大学生活について	<ul style="list-style-type: none"> ・1年間の大学生活を振り返ってどうだったか。 ・大学に入ってからイメージと違うと思ったことがあったか ・とっている授業や参加している活動について
3. 学業へのとりくみについて	<ul style="list-style-type: none"> ・どのように学業に取りくんでいるのか ・学業に取りくむことで何が得られると思っているか ・大学で学んでいることは将来どのように役に立つと思うか
4. 卒業後の進路や将来への展望について	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業後はどのような進路にすすみたいと思っているか ・将来どのような職業につきたいと思っているか

と、4) 調査で得られたデータは研究のためだけに使用し、論文には個人が特定されないように分析結果を記載すること、5) 個人情報調査終了後、それ以外のデータは研究終了後に破棄すること、6) 調査によって心身にストレス症状が現れた場合は適切な相談機関を紹介すること。面接調査開始時には口頭でも上記の事項を説明し、同意書のチェックリストへのチェックと氏名のサインをした協力者に調査を実施した。尚、本研究の計画は事前に京都文教大学「人を対象とする研究」計画等の審査に係る委員会に提出し、承認を得た。

分析の手続き

面接の録音データから逐語をおこしたトランスクリプション・データを対象に分析を行った。データの分析に入る前にあらかじめ、分析テーマと分析焦点者を設定した。分析テーマは「大学初年次生における大学生活への適応プロセス」とし、分析焦点者は「大学初年次生」とした。M-GTA では得られたデータは一連のデータとみなされ、調査協力者を対象とする比較は行われない。これは面接調査で人と人との比較基準を設定することが難しいためと、M-GTA は人と人との比較では十分にとらえられない複雑で繊細な人間現象を研究対象にするためである。

M-GTA では従来の GTA のようなデータの切片化は行わず、代わりに「研究する人間」としての分析者の主体的判断と解釈が重視される。このことを考慮し、分析は筆者単独で行い、分析後に再度、作成された概念、カテゴリー、カテゴリー・グループ、プロセス図について、1) 学生の実態に合っているか、2) 抽出されていない概念やカテゴリーが存在しないか、3) それぞれの相互関係は適切であるか、の視点に沿って妥当性を検討し、修正を行った。分析は以下の手順に従って行われた。

①分析テーマと分析焦点者に照らして、データの関連箇所に着目し、それを一つの具体例とする説明概念（以下、概念）を生成した。そして概念名、概念の定義、具体例などを記入した分析ワークシートを概念ごとに作成した。概念とその定義はある程度多様な類似例を説明できるように設定した。概念を解釈する際に検討した内容や別の解釈のアイデア、概念に関連した疑問はワークシートに理論的メモ欄を設けて記述した。

②新たな概念の生成と並行して、個々の概念について他の類似例をデータから探し、ワークシートの具体例欄に追加記入していった。これを理論的サンプリングという。具体例が一定程度あれば概念として成立しうる。具体例が多くなった場合は、類似例の検討作業はそれ以上不要としてワークシートの作成を終了するか、定義に幅がありすぎてふくらんだ場合は、条件を入れるなどして定義内容を限定し、複数の概念に仕分けした。また概念名と定義は具体例がそろうにつれて最適となるよう適宜修正を加えた。

③類似例の確認と並行して、対極例と矛盾例の有無についてデータを見ていった。対極例や矛盾例がある場合には、理論的メモ欄に注釈して記載したり、対極例を具体例とした新たな概念の生成を行った。これにより、概念の解釈が恣意的、操作的に陥る危険を防ぐことができる。

④概念の生成と同時並行で、生成した概念と他の概念との関係を個々の概念ごとに検討した。概念と概念の関係について着想したことは、理論的メモ・ノートを作成し、その都度記載した。

⑤データを一通り検討し終わった後で、より具体例の内容に即すように生成された概念を1つ1つすべてのデータと再び照らしあわせ、概念の修正を行った。その際具体例が豊富でない

概念は有効でないと判断した。有効でない概念の具体例が他の概念の具体例として使えそうであればそちらに移した。同時に修正された概念について、概念の具体例、対極例、矛盾例の有無について、すべてのデータを確認した。新たな概念生成の可能性がなくなったとみなされたところで概念の生成を終了した。

⑥次に、生成した概念と他の概念の関係を個々の概念ごとに検討しなおし、複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成した。さらに、カテゴリー相互の関係を検討し、複数のカテゴリーをまとめたカテゴリー・グループを生成した。カテゴリーとカテゴリー・グループの相互

関係から分析結果をまとめ、その概要を簡潔にモデル図にまとめた。

結果

これ以降の文章において、概念は【 】, カテゴリーは< >, カテゴリー・グループは『 』でそれぞれ示す。

概念の生成

分析ワークシートと対極例と矛盾例の検討をし、修正を行った結果、26 の概念を生成した。Table3 に概念とその定義、具体例を示す。

Table3 生成された概念とその定義および具体例

【概念】	定義/代表的な具体例 (一部を抜粋)
【主体的な目的意識】	定義: 明確な志望動機や大学に入ってやりたいことなど主体的な目的意識をもって入学した ・元々〇〇に興味があってここに入ったんで (協力者D) ・自分の人生やし、やれるうちにやりたいことやっといたらいいで (協力者A)
【受身的な志望動機】	定義: 周りに勧められたから、偏差値が合ったから、合格したからなど、受身的な志望理由で入学した ・第1志望とか落ちちゃって、ここだけしか受からなかったんで、その評判とかも悪くないし。(中略) それやったらここでいいんじゃないかなっていうふうに思って (協力者B) ・全然大学のことも知らなくて、〇〇大学を見付けて、名前かっこいいなと思って (協力者E)
【学問自体の魅力や意義の実感】	定義: 学問自体の面白さや魅力、学問が役に立つという意義を感じている ・純粋に学問を勉強してるんだっていうのが分かって、「ええ、めっちゃ楽しい」っていうのがあって (協力者B) ・絶対たぶん学んだことはどこかしら役に立つと思うから、無駄じゃないと思うし (協力者C)
【勉学の難しさや分らなさ】	定義: 大学で学び勉強することの難しさや分らなさを感じている ・ちよつと難しかったですがね、僕の頭では。(中略) あんまり頭に入らなかったっていうか、そんな感じでしたね (協力者E) ・大学生になったらちよつとうまく説明できるようになるかなとは思ってたんですけど、やっぱり今になっても、ちよつと「うーん？」となりますね (協力者G)
【教員への惹かれ】	定義: 教員との関わりの中で魅力を感じ惹きつけられている ・癖が強い先生が多いじゃないですか (協力者I) ・<楽しいと思える授業ってどんな授業ですか>先生が冗談言ったりとか、結構生徒思いなところがあつたりとかするときですね (協力者J)
【大学特有の自由さの認識】	定義: 自由になる時間が長い、教員の自由さなど、大学に特有の枠の緩さを認識している ・やっぱり高校生活と違って自由な時間が増えたなと思いました (協力者J) ・何か流れてる時間がゆっくりしてるとっていうか (協力者F) ・授業中にお菓子とかジュースを飲んでても何も言われないっていうのも、「そんな自由なの？」みたいな (協力者I)
【交友関係の広がり】	定義: 交友関係に大きな広がりがある ・高校のときよりは友達が多くなった気がします (協力者D) ・意外なつながりもあつたりしますね。(中略) なんか違う大学の人とかとめっちゃ知り合いになつたりとか、知らん間にSNSのフォロワーめっちゃ増えてるとか、「え？そんな有名なやつ？」みたいな (協力者F)
【友人関係の取捨選択】	苦手な人とは距離をとり、気の合う人とのみ付き合いなど友人関係を取捨選択している ・やっぱり交友関係とかが、初めに知り合った子と、もう全く付き合いなくなつて、(中略) こいつ「やっぱ苦手やわ」というのが出てきて (協力者A) ・今もそんないっぱい友達作るうって感じじゃないんですけど、気の合った人とは仲良くずつといたいなっていうふうに思つて (協力者B)
【周囲との協力】	定義: 先輩から情報を得たり、友人同士で協力しあつたりしながら大学生活に取りくんている ・先輩が言つてたみたいな、再履修やつたら授業に出ると、課題を話して先生に出すだけでいいから、めっちゃ楽ちやう？っていううわさみたいになつて (協力者D) ・友達とちよつと、「これってどういう意味？」みたいなことを聞いたりとか、授業についてその板書の内容とかについて、友達に聞いたりとかしてますね (協力者J)
【保護者や周囲の影響】	定義: 保護者への申し訳なさや、周囲への意識、他者から言われたことに影響されている ・周りに迷惑かけたらあかんと思って、真面目な子もやっぱり何人かおるんで、だから、もう寝ようつてなつて。友達も気づいたら全員寝てるんでええかって (協力者A) ・「大学は勉強するために行くもんや」つてずっと親に言われてたんで、取れる資格は取つて勉強して4年間で社会に出なさいつて言われてたんで (協力者F)
【勉学へのマジメさ】	定義: 勉学にマジメに取り組んでいる ・もう超真面目みたいな。怠けたこと？怠けたことないかもしれない、勉強に関しては (協力者C) ・覚える系は、とりあえず暗記で、この前やつたのは、教科書にちよつと大事そうな、先生が言つてはつたところとか大事そうなところを、もう緑のペンで消して、赤シートで隠して、もうそれを繰りかえしてやつた。レポートとかもうほんとうに思い付く言葉をとりあえずバツと書いて (協力者G)
【成績や単位の重視】	定義: 単位取得や成績を重視して大学生活を語っている ・前期は一応、どれくらいかわかんないんですけど、一応フルでは取つて、単位は。落ちなかつたです。(協力者H) ・一応春は「秀」、どつちも「秀」もらえたんで、それは自分でも、人生史上いっちゃん英語でいい点やつたんで、英語は一番やり切れたなというのがありますね。(協力者A)
【学業の非重視】	定義: 学業の重要度が他のことよりも低い ・授業は期待せんどこうと思つてる (協力者A) ・ちよつとモチベーションが、「もうええわ」みたいな感じで低かつたんですけど (協力者B) ・<今興味を持つることとかについてのはありますか？>そんなにないですかね (協力者E)
【学業スキルの獲得】	定義: 授業中寝たり、課題の手を抜いたり、計画的に課題を進めたりなどの学業におけるスキルを身に着けている ・一応はつきりは寝ようにする。(中略) 6限とかもちゃんと寝てるんで。寝ながら聞いているんで。寝てもコメントカード、裏面まで書けるようになったんで (協力者A) ・レポートのやつ授業ばつかり取つてたんですけど。そうしたらもうレポートに埋まってめっちゃしんどい。ちよつと今度からはバランスよく取らんと、これ死ぬなと思いました。(協力者D)

Table3 つづき

【経済的な視点】	<p>定義：大学生活を送ることについての経済的な視点を持っている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書も自分で全部買わなきゃいけないから、もう何万とか出したりとか、結構そこはきつかったりとかするし（協力者I） ・あと、アルバイトもできるようにになりましたし、その金銭面の余裕とかもあって、遊びに行く余裕もできましたね（協力者J）
【課外活動やアルバイト】	<p>定義：部活やサークル、その他の団体など、課外活動へ参加している</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プラスバイトしたりサークルも結構頑張ってるんで、それですごい自分の好きなこととか、いろんなことが幅広くできたなって感じがします。（協力者G） ・大学へ入って、初めに何かしようと思って〇〇に入ったんですよ。やってみると、「ああ、大学生こんな感じだな」と思ったんですけど、「しんどい」ってなって〇〇辞めちゃったんです（協力者D）
【自己決定と自己責任の認識】	<p>定義：自分で考えて方針を決め選択決定し、その責任を自分で負うという意識を持っている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学生活については、履修とかの登録も自分で選べるし、自分で登録する（協力者F） ・自分で物事を全部考えてやらなあかんとか、そういうのはあって（中略）自己責任はやっぱり強くなってるなっていうのが（協力者A）
【自他の相対化】	<p>定義：他者と自分のことを相対化して考えている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・短大生の子らとかは、いろんな試験とか受けて検定みたいなのをいろんなのを持ってはるんですよ（協力者D） ・さっきまでふざけたやんみたいな人が、めっちゃ真面目にしゃべったりするんで、やっぱりスッチの切り替えができる人が多いかなって思いますね（協力者F）
【高校との対比】	<p>定義：高校生活と大学生活を対比させ、異同を認識している</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校だと、一回つまりいたらもう全部つまりていくとかって考えてたから、絶対に分からないといけないってちょっと思って（協力者C） ・やっぱり高校とかとは違って、やりたいことだけをできるっていう環境なので、すごい無駄なことがない感じがしますね。（協力者E）
【家族離れと家族関係の振り返り】	<p>定義：家族との心理的、物理的距離が離れてくるなかで、家族関係を振り返り、見直している</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家に帰るのはやっぱり断トツで遅くなりました（協力者H） ・結構父に見放されてるようで、育てられてるのかなと思ったりとか（協力者I） ・結構家にいることが多いんで、ちょっと迷惑かけちゃってるなとは思いますが（協力者J）
【今後の学生生活の展望】	<p>定義：今後の学生生活の中で行いたいこと、成し遂げたいことなどの展望を持っている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゼミとかって、もうちょっと大学の入り組んだ、ちょっと踏み出しっていう勉強が、たぶん2回でできるかなって思ったんで、その辺がすごく楽しみです（協力者B） ・〇〇に関することだけっていうよりは、もっと広く視野を向けていきたいって思うようになって（協力者I）
【資格取得や就職への見通し】	<p>定義：将来の資格取得や就職の見通しをもちながら、大学生活に取り組んでいる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学院に進みたいんですけど、〇〇になりたいんですけど（協力者E） ・〇〇関係のお仕事につきたいかなと思ってます（協力者F） ・それが自分が社会出たら絶対苦労するやろな思ってたから、いち早く大学でそれ知ることできてよかったかなというのは（協力者A）
【将来への迷いや不安】	<p>定義：将来についての迷いや不安、葛藤を抱えている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就職がどうか、食いちがみみたいな感じであるんですけど、ちょっとそういうところが見通しがちょっと分からな過ぎて、どっちに行くか全然分かれへんです（協力者B） ・人生の選択をするのに、自分でちゃんとできてない風潮にあつて、自分が何したらいいんやろっていう感じに陥ってる（協力者D）
【大学生活の肯定的評価】	<p>定義：入学してよかった、大学生活を楽しめていると感じている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ここに来てよかったかな、よかったなって思います。普通に間違ってたとは思わないですね、大学選び（協力者H） ・行きたくないなって思ったことがないので、大学に、毎日楽しいです（協力者F）
【大学への不満】	<p>定義：講義の在り方や大学のシステム自体などに不満を抱いている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生から割と実践的な感じの授業があるのかなと思ってて、（中略）1年生でできるのかなと思ったら、1年生でできなくて、ああ、できひんのやって思った（協力者D） ・教科書って先生が書かれてるじゃないですか。それで新しい学期が始まったら買うじゃないですか。でも、教科書を使わへんみたいな感じっていうのがちょっと（協力者G）
【自己理解の深化】	<p>定義：自分の性格や適性について深く考え、自己理解が深まっている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・〇〇のこととか学んでいくのが、意外と自分に合ってるんやなっていうのが、勉強していくうちに分かって（協力者H） ・何でこの子のこと苦手思ってるんやろとかね、理解しようとしてへんかなとかいって思ってる自分の中を自分で探ったり（中略）深く考えるきっかけにはなってる（協力者A）

注：＜斜字体＞：調査者の発した言葉、_____：分析者の着目箇所
 注：固有名詞はすべて〇〇で示した。

大学初年次生はやりたいことや学びたいことなど【主体的な目的意識】をもって、あるいは周りに大学を勧められたから、偏差値が合った

から、合格したからなど【受身的な志望動機】で大学に入学してくるといふ、志望動機にまつわる2つの概念が生成された。本来のM-GTA

では、調査協力者を対象とする分析は行わないが、【主体的な目的意識】と【受身的な志望動機】両方の具体例が複数の同一協力者から抽出された。【主体的な目的意識】と【受身的な志望動機】は相反するものではなく、双方が補い合っており、初年次生は大学入学前にどちらともを吟味するようである。

大学入学後に経験することとして、学問自体の面白さや魅力、学問が大学以外の場面で役に立つという【学問自体の魅力や意義の実感】が得られる。一方で、大学で学び勉強することの難しさや学問自体の分からなさを感じる【勉学の難しさやわからなさ】を抱えることもある。また学問以外の経験要素として、教員との関わりの中で生じる【教員への惹かれ】や、自由になる時間が長かったり、時間割を自分で決められたり、ルールやしほりが緩やかだったりというような【大学特有の自由さの認識】も確認された。

対人関係面では、大学入学直後から1年間の間に【交友関係の広がり】があらゆる場面で起きることが認められた。しかしほどなくして【友人関係の取捨選択】が行われ、人間関係は収束に向かうようである。ある程度人間関係が落ち着いていく中で、先輩から情報を得たり、友人同士で協力したりしながら、学業や大学生活にとりくむ【周囲との協力】がなされる。また保護者への申し訳なさや、周囲への意識、他者から言われたことなどに影響をうける【保護者や周囲の影響】という概念も生成された。

また初年次生が実際にどのように大学で学業に取り組んでいるかということ、ほとんどの学生達は提出物を期限どおりに出したり、ある程度のテスト対策を行ったりしており、【勉学へのマジメさ】が確認された。そして自らの学業に対する評価を語る際には【成績や単位の重視】がなされていた。一方で学業自体はそれほど重

視しているわけではない、【学業の非重視】という態度が起こることもある。また授業中うまく寝たり、課題の手を抜いたり、計画的に課題を進めたりなど【学業スキルの獲得】がなされるようである。学業以外の大学生活としては、どれくらいのお金がかかっているのか、自分が自由に出来るお金はどのくらいかなど、大学生活を送ることについての【経済的な視点】が生成された。また部活やサークル、その他の団体などの【課外活動やアルバイト】への参加も認められた。

上記のような学業やそれ以外の大学生活における経験や対人関係の中で、学生は自らについて振り返りを行っているようである。たとえば【自己決定と自己責任の認識】を強く持つようになったり、【自他の相対化】をして自分と他人を相対的にとらえなおそうとしたり、【高校との対比】をして大学という場の意義や意味を考えたり、【家族離れと家族関係の振り返り】をして自立への道を進むなどしている。その中で今後の学生生活で行いたいこと、成し遂げたいことなど【今後の学生生活の展望】をもち始め、さらには卒業後の将来の【資格取得や就職への見通し】が現実的になり、それが学業などの大学生活への取り組み方を規定していく。また自分について振り返る中で、【将来への迷いや不安】や葛藤が生じることもあるようである。

こうした大学生活の中での経験を通して、この大学に入学してよかった、大学生活を楽しめていると感じるなど【大学生生活の肯定的評価】をしている。一方で講義のあり方や大学のシステムなどに納得できないなど、【大学への不満】を持つこともある。そして自分の性格や自分の適性について、深く考え理解する【自己理解の深化】が進んでいることが確認された。

カテゴリー、カテゴリー・グループの作成

カテゴリーとカテゴリー・グループを、概念間の時間的順序と、概念同士の意味の類似性から構成した。その結果、13のカテゴリーと6のカテゴリー・グループにまとめられた(Table4)。

『入学時の動機』【主体的な目的意識】【受身的な志望動機】という2つの<大学入学への志望動機>は、双方が互いに補い合っ『入学時の動機』として大学生生活の過ごし方や大学生生活へのとりくみ方に影響を与えていると考えられる。

『大学生生活の魅力』【学問自体の魅力や意義の実感】と【勉学の難しさやわからなさ】は、大学で学ぶ学問自体が魅力的かどうかに関係し

ているため、<学問の魅力>とした。【教員への惹かれ】や【大学特有の自由さの認識】は、学問以外の大学という場やその中での経験によって魅力を感じるかどうかということであるため、<大学の魅力>とした。これらは『大学生生活の魅力』としてまとめられる。

『対人関係』【交友関係の広がり】と【友人関係の取捨選択】は入学直後から時系列的に連続して起こる出来事であると考えられるため<交友関係の広がり取捨選択>とした。一方で学業や大学生生活への取り組みにある程度持続して影響を与えるのは【周囲との協力】と【保護者や周囲の影響】であるため、これらをまとめて<他者からの影響>とした。これらは大学生生活を送る学生の『対人関係』と考えられる。

Table4 カテゴリー・グループ、カテゴリー、概念

カテゴリー・グループ	カテゴリー	概念
『入学時の動機』	<大学入学への志望動機>	【主体的な目的意識】
		【受身的な志望動機】
『大学生生活の魅力』	<学問の魅力>	【学問自体の魅力や意義の実感】
		【勉学の難しさやわからなさ】
	<大学の魅力>	【教員への惹かれ】 【大学特有の自由さの認識】
『対人関係』	<交友関係の広がり取捨選択>	【交友関係の広がり】
		【友人関係の取捨選択】
	<他者からの影響>	【周囲との協力】 【保護者や周囲の影響】
『学生生活』	<学業への態度>	【勉学へのマジメさ】
		【成績や単位の重視】
		【学業の非重視】
	<学業以外の大学生生活>	【学業スキルの獲得】
		【経済的な視点】
『リフレクション』	<主体性の認識>	【課外活動やアルバイト】 【自己決定と自己責任の認識】
	<自他の相対化>	【自他の相対化】
		【高校との対比】
	<時間的展望>	【家族離れと家族関係の振り返り】
		【今後の学生生活の展望】
		【資格取得や就職への見通し】
『大学生的思考の形成』	<大学生生活の評価>	【将来への迷いや不安】
		【大学生生活の肯定的評価】
	<自己理解の深化>	【大学への不満】 【自己理解の深化】

『**学生生活**』 大学生の学生生活において最も重要と考えられる学業への態度に関連している概念として、【**勉学へのマジメさ**】、【**成績や単位の重視**】、【**学業の非重視**】、【**学業スキルの獲得**】が得られた。これらは<学業への態度>を示していると考えられる。また<学業以外の大学生生活>として【**経済的な視点**】と【**課外活動やアルバイト**】がある。これらを『**学生生活**』としてまとめた。

『**リフレクション**』 【**自己決定と自己責任の認識**】は大学における<主体性の認識>であると考えられる。一方で【**自他の相対化**】、【**高校との対比**】、【**家族離れと家族関係の振り返り**】は、自分と他者を照らし合わせて考えることであるため<自他の相対化>とした。また【**今後の学生生活の展望**】、【**資格取得や就職への見通し**】、【**将来への迷いや不安**】は、現在から先の学生生活や卒業後の就職にむけた<時間的展望>の獲得であるといえる。これらは全て学生が自らについて振り返り内省することであるととらえ、『**リフレクション**』とした。

『**大学生的思考の形成**』 【**大学生生活の肯定的**

評価】、【**大学への不満**】は、学生生活を送るうえで大学に抱く肯定的あるいは否定的な評価であるため<大学生生活の評価>とした。<自己理解の深化>と合わせたこれらは、大学初年次生が学生生活を送る中で大学生としての思考を形成していくことであると考えられるため、『**大学生的思考の形成**』としてまとめた。

モデル図の作成

概念作成の際に分析ワークシート上で検討した類似例や対極例や矛盾例と、概念同士の相互関係についてのアイデアをその都度記載した理論的メモ欄を再吟味した。そして関係性や連続性を考慮して、大学初年次生の「学生化」のプロセスを示したモデル図を作成した(Figure1)。

まず学生は大学生生活の中で、『**入学時の動機**』を基にして学問や大学生生活自体への『**大学生生活の魅力**』を認識する。それに加えて大学という新しい環境で新たな出会いを得たり、周囲の他者からの影響をうけたりなど『**対人関係**』を持つ。『**入学時の動機**』、『**大学生生活の魅力**』、『**対**

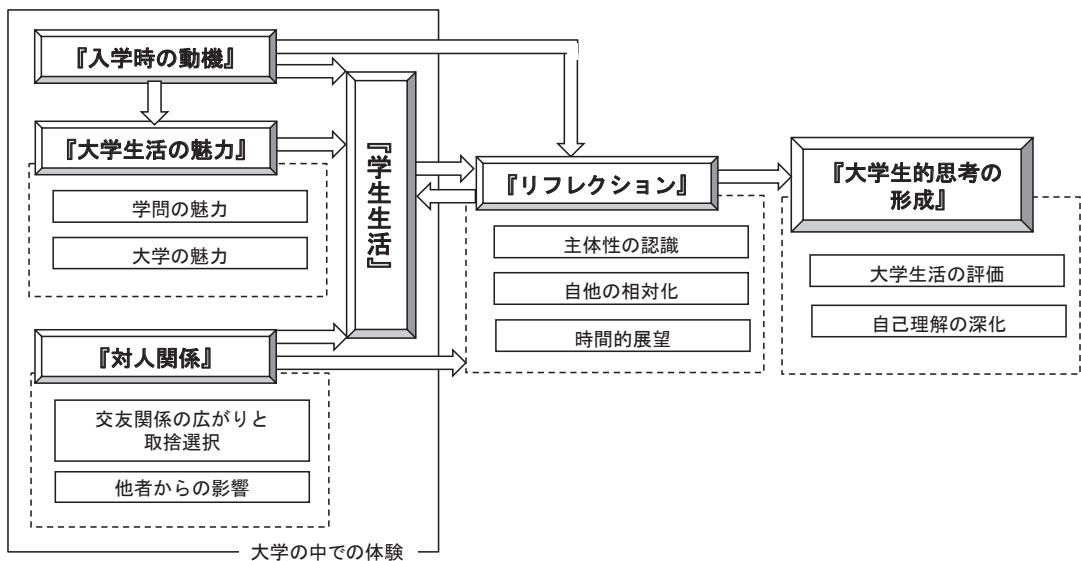


Figure1 大学初年次生の「学生化」プロセスのモデル図

人関係』は学業やそれ以外の活動などへの取り組みに影響を与え、『学生生活』を規定する要因となる。自らの『学生生活』やそもそも抱いていた『入学時の動機』、『対人関係』などの要素を吟味することで、学生は自らについて振り返り内省する『リフレクション』を行う。その中で行われる自他の認識の再構成や時間的展望の吟味は、再び『学生生活』への取り組みに影響を与えるだろう。そういった取り組みを通して、大学への肯定的あるいは否定的評価がなされたり、自己理解を深めたりすることで、大学初年次生の『大学生的思考の形成』がなされるというプロセスをたどる。

考察

現代の大学生は自身の内部にあるやりたい事や将来の目標を重視すると溝上（2004）が述べたのと同様に、大学初年次生は何らかの【主体的な目的意識】をもって大学に入学してくるようである。しかし一方で、大学初年次生は周囲に進められたから、偏差値が合ったからなど、【受身的な志望動機】を考慮してもいた。こちらは原田（2013）のいう「さとり世代」の青年としての大学生の姿を反映していると考えられる。二つの入学動機は相反するものではなく、大学初年次生はそれぞれの情報を吟味しリスク査定をしたうえで、大学に入学しているようである。主体性と受身性の双方のバランスをとろうとするのが現代の大学生の特徴であるといえる。

大学生が学問自体への魅力を感じたり、教員や大学特有の自由さに魅力を感じたりすることは、杉谷（2016）が大学生の「学生化」への移行に必要であるとしたことである。また野崎・後藤（2015）が高校から大学生活への移行の特徴としてあげた接触する相手や自らの行動範囲

の広がり、『対人関係』のカテゴリーとして確認できた。これらは大学初年次生の「学生化」がおこるうえで非常に重要な、大学という場に特有の要素である。溝上（2001）が、大学生の自己評価を規定する要因としての他者要因の出現率の多さを示していることから、次の『リフレクション』につながる重要なものと考えられる。

大学初年次生の学業態度として得られた【勉強へのマジメさ】は、「まじめ化」した現代大学生の特徴である。また【成績や単位の重視】や【学業の非重視】、【学業スキルの獲得】は、杉山（2016）や松本（2016）が述べた「生徒化」する学生の特徴である。こういった学業態度の特性は、本研究の対象が大学初年次生であったために得られたと考えられる。つまり、大学初年次生の時点では、学生達は未だ「生徒化」した状態であり、「学生化」のプロセスの途上にあると推察される。

大学初年次生が「学生化」のプロセスを進むためには、『リフレクション』の機能が非常に重要となるだろう。大学生活における主体性を認識したり、自分と他者を照らし合わせて考えたり、今後の学生生活や将来への時間的展望を得たりすることで、自らの学生生活を評価でき、自己理解が深まると考えられる。このようなりフレクション機能の効果については、教員や大学側の介入による効果研究が山田（2004）などによって行われている一方で、学生を主体として自然と起こるリフレクションについては、あまり検討されていない。この点についてはさらに研究を積み重ねる必要がある。

リフレクションが自然と発生するためには、多くの他者との出会いや自主性や主体性が確保されるなど、杉谷（2016）や磯野・飛永（2012）、野崎・後藤（2015）が述べた大学という場の機能や構造が大きく寄与すると考えられる。「学

校化」された大学の中では学生は「生徒化」すると考えられるため、大学という場独自の特徴を活かして、大学生の「学生化」を支えることが、大学生の成長につながるのではないだろうか。

本研究では大学初年次生が最終的に『大学的思考の形成』に至るプロセス図が生成された。しかし「大学生化」のプロセスは、初年次生の間で完成あるいは完結するものではないだろう。鶴田 (2001) や堀井 (2017) のいう「学生生活サイクル」の中で絶えず変化し進展していくものと考えられる。本研究で得られたプロセス図においては、今後学年が上がる中で、大学生としての思考がさらに深まる過程が期待される。

今回の研究協力者達は自ら研究協力の応募フォームに入力をした、学生生活への意識の高い学生であったと考えられる。また筆者が協力依頼をしたことによって、学部にも偏りがあった。今回得られた結果が、一般的な大学初年次生にどの程度適用可能かどうか、そして学年が進む中で「学生化」のプロセスがどのように変化していくかについては、さらに検討する必要がある。M-GTA では調査対象者を絞り込む技法的限定を肯定的にとらえ、作成されたプロセス図をその後の実践の中で検証することを重視する (木下、1999、2003、2007)。その手法に則って今後の研究を継続していく。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2015). 大学での学びと成長に関するふりかえり調査 ベネッセ教育総合研究所 <<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail.php?id=4701>> (2018年10月3日)
- ベネッセ教育総合研究所 (2016). 第3回大学生の学習・生活実態調査報告書 [2016年] ベネッセ教育総合研究所 <<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail.php?id=5259>> (2018年10月3日)
- Erikson, E. H. (1959). *Psychological issues identity and the life cycle*. International Universities Press, Inc. (小此木啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル—誠信書房)
- Glaser, B., & Strauss, A. (1967). *The discovery of grounded theory—strategies for qualitative research*. (後藤隆・大出春江・水野節夫訳 (1996). データ対話型理論の発見 新曜社)
- 原田新・池谷航介・松井めぐみ・望月直人 (2018). 「大1 コンフュージョン」の実際 (第1報—高校と大学のギャップに戸惑う新入生の実態調査— 岡山大学教師教育開発センター紀要, 8, 97-107. (Harada, S. & Iketani, K. & Matsui, M. Mochizuki, N. (2018). Study of “confusion after the entrance to higher education” I Investigation on “Confusion after the entrance to higher education” Reprinted from *Bulletin of Center for Teacher Education and Development, Okayama University*, 8, 97-107.)
- 原田曜平 (2013). さとり世代—盗んだバイクで走り出さない若者たち 角川書店
- 堀井俊章 (2017). 大学生の人間的な成長に関する研究の動向 横浜国立大学教育人間科学部紀要. I, 教育科学, 19, 163-181. (Horii, T. (2017). Personal growth in university students: An overview of research *Journal of the Faculty of Education and Human Sciences, Yokohama National University. The educational sciences*, 19, 163-181.)
- 磯野誠・飛永佳代 (2012). 大学教育成果としての学生自己成長感 九州共立大学研究紀要, 2, 25-38. (Isono, M. (2012). Student growth as an effect of college education. *Study journal of Kyushu Kyoritsu University*, 2, 25-38.)
- 金子元久 (2012). 大学教育と学生の成長 名古屋高等教育研究, 12, 211-236. (Kaneko, M.)
- 片桐新自 (2009). 不安定社会の中の若者たち—大学生調査からみるこの20年—世界思想社
- 木下康仁 (1999). グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生 弘文堂
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い 弘文堂
- 木下康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法—修正版グラウンデッド・セオリー・ア

- ブローチのすべて 弘文堂
- 松本留奈 (2016). 【データを読む】8年間の学生の変遷からみえる大学教育の成果と課題 ベネッセ教育総合研究所 第3回大学生の学習・生活実態調査報告書 [2016年], 17-29. (Matsumoto, R.)
- 溝上 慎一 (編) (2001). 大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学— ナカニシヤ出版
- 溝上慎一 (2004). 現代大学生論—ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる—NHK ブックス
- 文部科学省 (2017). 学校基本調査—平成29年度結果の概要— 文部科学省 <http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1388914.htm> (2018年10月3日)
- 村澤知多里・山尾貴則・村澤真保呂 (2012). ポストモラトリアム時代の若者たち—社会的排除を超えて— 世界思想社
- 野崎耕一・後藤俊夫 (2006). 大学生の成長の考察 静岡産業大学情報学部研究紀要, 8, 231-395. (Nozaki, K. & Goto, T. (2006) Analysis of the development of university students' motivation. *Bulletin of Shizuoka Sangyo University*, 8, 231-395.)
- 小此木啓吾 (1978). モラトリアム人間の時代— 中央公論社
- 佐久田祐子・川上正浩・奥田亮・坂田浩之 (2015). ポストモダンにおける大学生の成長モデルと時間的展望獲得に関する探索的研究—大阪樟蔭女子大学研究紀要, 5, 236. (Sakuma, Y. & Kawakami, M. & Okuda, R. & Sakata, H.)
- 杉谷祐美子 (2016). 「生徒化」している大学生と「学生化」への移行—ベネッセ教育総合研究所 第3回大学生の学習・生活実態調査報告書 [2016年], 17-29. (Sugitani, Y.)
- 高木秀明 (1999). モラトリアム—中島英明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典—有斐閣—Pp.845
- 鶴田和美編 (2001). 学生のための心理相談—大学カウンセラーからのメッセージ— 培風館
- 山田剛史 (2004). 過去—現在—未来にみられる青年の自己形成と可視化によるリフレクション効果—ライフヒストリーグラフによる青年理解の試み— 青年心理学研究, 16, 15-35. (Yamada, T. (2004). Self-development of adolescence in

terms of past-present-future and effects of reflection by visualization—An attempt to understand adolescence by the life-history graph— *Japan Society of Youth and Adolescent Psychology*, 16, 15-35.)

渡部 真 (2005). 「大学の学校化」とモラトリアム— 現代のエスプリ, 460, 130-141. (Watabe, M.)

謝辞：調査にご協力くださった皆様に深く感謝申し上げます。

脚注：本研究は京都文教大学2018年度ともいき研究推進センター研究助成を受けて実施された。面接の録音データからの逐語おこしは合同会社亀澤企画に依頼した。I would like to thank Editage (www.editage.jp) for English language editing.

Abstract

The Growth of First Year University Students

Kyoko SUMIOKA

This study focuses on the mental growth of university students during their first year in the university by investigating the underlying psychological process. Ten students (all first graders, two men and eight women) participated in a semi-structured interview. Using the Modified Grounded Theory Approach (M-GTA)-, a model of the psychological process underlying the growth of the students emerges, which comprises 26 concepts, 13 categories, and 6 category groups.

From the model, students first consider the “attractiveness of the university” as their “motivation for admission.” Second, “motivation for admission,” “attractiveness of the university,” and “interpersonal relationships” are factors that regulate “students’ lives.” Last, students begin to “reflect on themselves,” gradually developing “the thinking form of university students,” and then begin to evaluate universities and deepen their self-understanding. This model suggests that the process of students “reflecting on themselves” is most important for their growth as university students, at least during their first year.

Key words : Growth of first year university students, Qualitative Research, semi-structured interview, Modified Grounded Theory Approach (M-GTA)